

かいぼうじょうしょ
海防上書

東京・岩本町

史書を

訪ねて



この八策のなかでも、西洋流の大砲をたくさん造ること、軍艦を造って海戦戦術を訓練することの二つが、もっとも大切でございましょう。ところが、そのもっとも肝心の西洋流軍艦の建造を、幕府は禁止しております。…平時には平時の法、非常時には非常時の制ということ、古今を通じての真理だと思われまます。

「海防上書」(松浦玲・責任編集、中公論社、日本の名著30 佐久間象山、横井小楠)から

読売新聞オンラインに動画



海防上書

別名「海防八策」。アヘン戦争を踏まえ、英国の侵略を防ぐため洋式火器や戦艦建造のほか、国中に学校を建て民衆に教育を浸透させること、秀でた人材を諸藩から幕府に送る制度を設けることなどを説く。松本健一氏は「(幕末)志士たちの社会変革論や近代化の構想は、この『海防八策』にほとんどふれられていたといっただろう」(中公叢書「評伝 佐久間象山」)と評している。

西洋見る目 清の魏源と好対照



解く

新村容子

岡山大名誉教授

佐久間象山が「海防に関する藩主宛上書」を建白した同じ年、中国では魏源が「聖武記」を著し、アヘン戦争の敗因を分析した。のちに「聖武記」を読んだ象山は、自己の主張と「約せずして同じ」議論が見られることに驚き、「真に海外の同志といふべし」と「省督録」に記している。しかし、魏源と象山とを読み比べてみると、むしろ相違こそが顕著である。

新式軍備の導入に関しては、魏源は「舟を造るは舟を購うに如かず」と論じ、外国からの購入の利便性を主張した。一方の象山は、購入と同時に自力での建造に着手すべしと論じ、西洋科学技術を学ぶ必要性を力説している。

外国書の翻訳に関しては、象山は「辺鄙の浦々里々」の「愚夫愚婦」までもが外国書を読み世界を知るべきだと考えていた。魏源は下賤の民の教育など端から問題としていない。

転換の時期、世界を見る目をいかに獲得するか。魏源は、イギリスの軍艦を内河奥深く誘い込み攻撃する戦法をとっていたならば、勝機があったはずだと悔しがっている。魏源は敵の軍艦が自己の想像も及ばないものであることを知らなかった。象山が繰り返し説く「彼を知り己を知るは、兵法家・孫子の本國では忘れられていたのだろうか。」

*「史書を訪ねて」は、「日本書紀を訪ねて」と交互に火曜日に掲載します。

● Culture

アヘン戦争における中国(清)の敗北に衝撃を受けた幕府は、老中、信州松代藩主・真田幸貫を特命の海防掛に任じた。「海防上書」(海防に関する藩主宛上書)は、幸貫の諮問を受けた同藩士・佐久間象山が書き上げた意見書である。俗に「海防八策」と呼ばれるものだ。

上書の日付は天保13年(1842年)11月24日。新暦に直すと12月である。中国が香港割譲と多額の賠償金を課せられた南京条約の締結からわずか4か月後のことだった。上書は次のように言う。

英国は中国との戦争後、日本との交易を求め、もし断られたら、長崎・薩摩・江戸の3か所に軍艦を送る考えと伝えられる。兵を構えて交易を始め、日本の利益をないがしろにするつもりだろう。

英国は武略に長じた国だ。軍事に携わる者は軍事に専念し、他国への略奪等にあたる。江戸の火消しが火事が起きるのを好むように、彼らは戦争を好む。万一、事が起これば、彼らは江戸の海上輸送路を遮断するはずだ。大島あたりを占拠し、伊豆、相模、房総沖に数隻の軍艦を並べ、江戸に米が入るのを妨げるだろう。我が方が軍船を繰り出

して打ち払おうにも、水軍(海軍)の訓練をしていないから必敗は目に見えている。

象山はこのように論じた上で、八つの策を挙げ、その中でも、西洋式の大砲を大量に造ることと、戦艦を建造して水軍の練習を積むことの二つが急務だと説いた。

ただ、戦艦建造に着手するには高い壁があった。幕府黎明期に打ち立てられた大船建造の禁である。諸大名を統制するための軍備制限策だ。だが象山は、それを緩める以外に外国の侵略を防ぐ策はないと言った。平時には平時の法に従い、非常の際には非常の制を用いるのが、日本でも中国でも古今の道徳である、と訴えた。

当時の象山は、神田お玉が池

軍艦建造訴え 象山の八策

- ◆佐久間象山「海防上書」とその時代
- 1839年 佐久間象山、神田お玉が池に塾を開く
 - 40年 アヘン戦争始まる(～42年)
 - 41年 天保の改革始まる。松代藩主・真田幸貫、老中に就任
 - 42年 南京条約締結。幸貫、海防掛を担任。象山、幸貫の顧問になり、海防に関する藩主宛上書を提出
 - 51年 象山、木挽町に塾を開く
 - 53年 ペリー来航。幕府、大船建造の禁を解く
 - 54年 ペリー再来航。象山、日米交渉の警護に出役。吉田松陰の密航未遂事件に連座



「お玉が池児童遊園」にある池跡の木柱

【アクセス】都営地下鉄新宿線若本町駅が最寄り駅。「繁栄お玉稲荷一や、お玉ヶ池種痘所跡」などに往時の痕跡をとどめる。

に居を構え、「象山書院」という塾を開いていた。現在の東京都千代田区若本町の辺りだ。地名は、お玉という茶屋の娘が池に身投げしたという伝承に由来するが、象山がいた江戸後期に大きな池はなかった。地図研究家の芳賀啓さんは、「正確な古

地図でお玉が池を描いているのは皆無。でも地名として残っているのは重要で、湿地帯があったのだろう」と推測する。

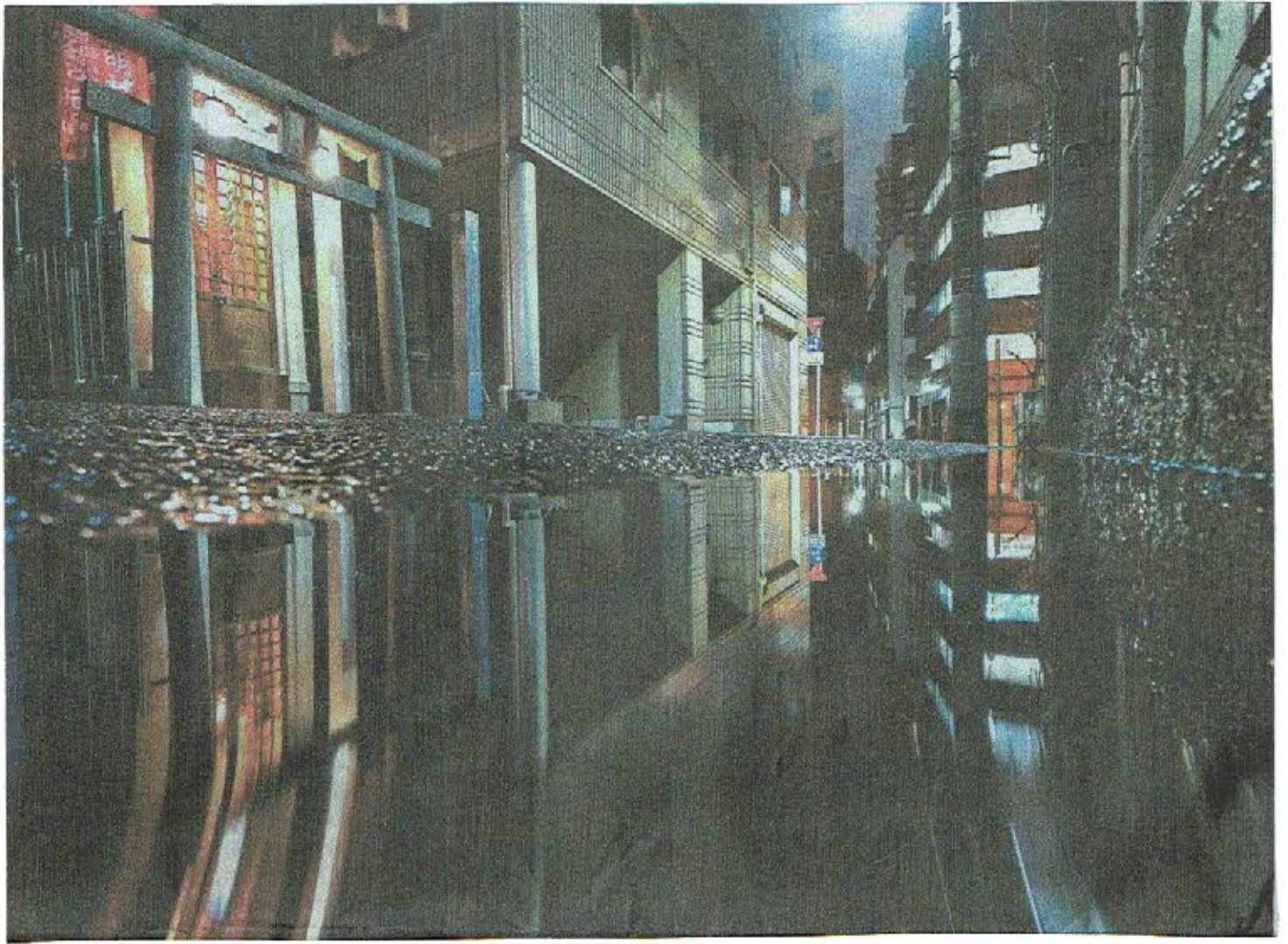
この地には学者、文人が多く住み、北辰一刀流の千葉周作の道場もあった。東大医学部の源流となるお玉ヶ池種痘所も、幕

末に立地している。

儒学を教えていた象山は、海防八策を書く前に、伊豆並山の代官で洋砲術家の江川太郎左衛門に入門している。その後の象山は、オランダ語を猛烈と学び、砲術書を読み、大砲を自作した。ガラス製造や電信の実験などに

も手を染めた。「東洋道徳、西洋芸術」という象山の思想の核心はそうして形成されていった。

砲術家として名を成した象山のもとに、勝海舟、坂本龍馬らが足を運んだ。木挽町、現在の東銀座に五月塾を開くのは嘉永4年(1851年)で、吉田松陰、小林虎三郎らが入門する。ペリーの来航はその2年後である。黒船に驚いた幕府はようやく大船建造を解禁する。海防八策から10年が過ぎていた。(笹森春樹)



雨でできた小さな水たまりに入れた小型カメラから見た「繁栄お玉稲荷」。お玉が池はこの辺りにあったといわれている（東京都千代田区で）—鈴木竜三撮影